

## 委員会報告

## 土木図書館の一層の活用を目指して

## —土木図書館委員会活動報告—

土木図書館委員会委員長 五十畑弘(日本大学)  
 幹事長 今 尚之(北海道教育大学)  
 事務局 坂本真至(土木学会)

## はじめに

土木にかかわるさまざまな情報、学会活動の成果などを蓄積する土木図書館は、土木の総合的な学術情報センターとして土木技術、事業にかかわる活動に寄与することが期待されている。土木専門情報の提供は、土木専門家である会員への重要なサービスであるとともに、さらには土木事業の発展や技術の向上、あるいは技術者の資質向上を図るために学会が社会に果たす重要な役割でもある。

近年の研究活動成果などのデジタル化の飛躍的な進展は、情報量の拡大によって、情報の検索、選択、あるいは情報公開という新たな課題をもたらしている。本文では、土木分野の学術情報センターとしての図書館運営の支援を活動の柱とする土木図書館委員会の活動内容について報告する。

## 委員会の役割と構成

本委員会は土木技術映像委員会とともに情報資料部門を構成している。その役割は、「土木図書館が専門図書館として十分に機能し、土木工学の進歩および土木事業の発展ならびに土木技術者の資質向上を図り、学術文化の進歩と社会の発展に寄与できるよう、土木図書館活動について審議するとともに、必要な支援を行う」ことにある。委員数は16名、小委員会は「選書」、「近代資料収集調査」、「情報検索支援システム研究」、「土木仮想博物館研究」、「図書館連携」、「図面資料研究」の6組織となっている。

## 活動経過と課題

土木図書館の2005(平成17)年度利用実績は来館者数が4,100名で前年比1.3倍、複写依頼枚数が4万枚で漸増となっている。また土木図書館ホームページの年間アクセス数は2002(平成14)年5月の新土木図書館開館以来飛躍的に増加し、年間20万件に達している。

土木図書館委員会がデータベース構築に着手したのはかなり早く1993(平成5)年にさかのぼる。以来、改善を重ね、情報提供サービスの充実を図るとともに学会情報資源の活用を目指してきた。

主なものとして、①類義語支援・連想型の検索システム

の構築、②土木学会発行の主要論文25万件のデータベース化・原文デジタル化などの活動を実施している。これらの資源をいかに公開・活用していくかが大きな課題である。

## 課題への取組み

最近の土木図書館委員会の課題とその主な取組みには次のものがある。

## (1) 情報公開に関するアンケート結果

デジタル化された論文などは、インターネットによって、時間や場所の制約を越えた提供と利用が可能となり、地方の会員を含めた会員サービスの向上や、論文、技術報告の活用が図られる。そこで、図書館委員会として具体的な公開方法を検討するにあたり、学会の各委員会などの意見を把握するために「土木学会学術資料の公開に関するアンケート」を実施した(2006年7月実施)。

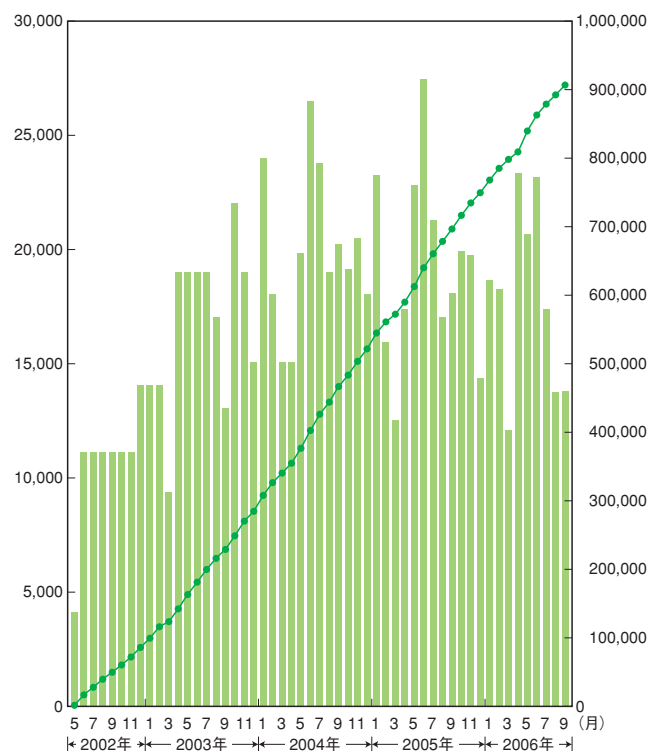


図-1 土木図書館ホームページアクセス数  
(2002年5月～2006年9月)

表-1 デジタル化された論文等の公開に関するアンケート調査結果

■公開する場合の条件			■会員と会員以外との区別		
	件数	割合		件数	割合
すべて一般公開	4	12%	会員はすぐに一般は1年後	8	24%
会員と一般を区別して公開	13	39%	会員はすぐに一般は3年後	1	3%
すべて非公開	10	30%	会員はすぐに一般は5年後	5	15%
回答なし	6	18%	その他	19	58%
総計	33	100%	総計	33	100%

アンケートは、学会の各部門および委員会を対象として実施し、依頼した50件のうち33件の回答を得た(調査研究部門22件、会員支部部門4件、出版部門2件、他5件)。

アンケートでは、現在の公開状況と、公開の可否やその条件、著作権などについて質問した。その結果の一部を表-1に示す。

集計結果を要約すると、すでに委員会のホームページその他でデジタル化された論文の提供を行っているとの回答が4件あった。また、公開に対する考え方では、公開の方向を示す回答が半数を占めたが、すべて非公開とする回答も約30%あり、調査研究部門では回答が2分化する傾向にあった。自由記述をみると、論文などの公開は学会活動の活性化につながるという意見が多いものの、会費を負担している会員のメリットや編集のコストなど検討すべき課題も数多く指摘された。また、会員と会員以外の区別については、公開時期のほかに、公開する内容による意見などがみられた。委員会では、今回の結果を参考に、学会としての統一的な公開のガイドライン等の策定に向けて検討を進めていきたい。

(2) 新検索システム(連想検索)の稼働開始

10月初頭から連想検索機能を有する新検索システムの一般向け公開を開始した。連想検索とは、思いついたフレーズから重要な言葉を自動抽出し、また検索結果から特徴的なキーワードを連想用語として提示するもので、「学術用語対訳・類語オンライン辞書」や「土木用語大辞典」による関連語の表示機能を有する。文献検索の範囲を広めて思いがけない文献リストを示唆してくれる、今までの絞り込み型検索とは一味違う仕組みで、増加するデータベースの活用にも有効な手段の提供が可能となる。土木図書館委員会では今後も従来の検索システムを併用しながら、随時利用者の声を反映しシステムをバージョンアップしていく予定である。

(3) 仮想博物館構想—社会への情報発信

土木図書館が有する学術情報資源をもとに、「土木」を

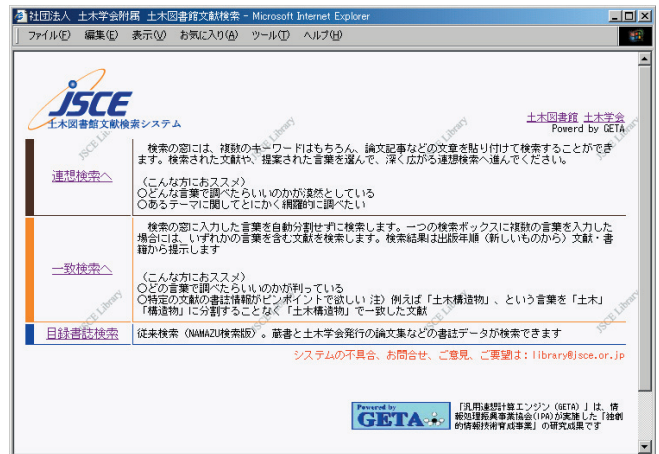


図-2 土木図書館新検索システムのトップ画面

一般の方々や専門家、あるいは小中高生・大学生などいかに伝えていくか、土木の歴史的過去から現在までを俯瞰するような土木ミュージアムの構想を検討し、教育企画・人材育成委員会や社会コミュニケーション委員会とも連携しながら、実施に向けて検討を進めている。

(4) 資料調査、出版、企画展などの実施

初代会長古市公威の生誕150年(学会90周年)に伴い、土木史研究委員会と共同で『古市公威とその時代』を出版、「古市公威とその世界」企画展示を各地で開催した。また江戸開府400年に伴う江戸のインフラ整備を紹介する「江戸の街づくりと国土マネジメント」など委員会独自の調査研究に基づく企画展示なども実施している。

(5) 土木図面の扱いの検討

これまで土木図面については土木図書館の収集対象範囲に入っていなかった経緯があるが、将来的な維持補修の情報として、あるいは「土木」を伝える貴重な資料であるとの認識に立ち、その収集や保管について検討を開始している。具体的には、先般土木研究所から発見された、昭和戦前期に活躍した増田淳設計の橋梁図面約1,000点をもとに保管や公開における課題検討、デジタル化の試みなどを開始している。

あとがき

土木図書館委員会では、引き続き上記の課題に取り組むとともに、土木分野の学術情報センターとしての土木図書館のより一層の利活用を支援していきたいと考えている。なお、1999(平成11)年度から本格化した蓄積資料のデータベース化・デジタル化では、文部科学省科学研究助成を継続的に受けていることを付記する。